

## \***京都府PTA協議会会長賞**

### 「絆」

亀岡市立大成中学校 1年  
榎原風音

平成23年3月11日、東日本大震災が発生しました。津波で家は流され、大きなゆれと津波でたくさんの人達の命がうばわれました。

私の父は福祉関係の仕事をしています。そこで父は宮城県塩釜市の災害ボランティアセンターの支援に行くことになり、地震直後の現地はとてもひどいものだったと後で話してくれました。

父が宮城県に行く時、私は見送りに行きました。その時、まだ私は幼くて、「さびしい」と思い泣きそうになったことを今でもよく覚えています。でも今思えばそんな私の感情よりも被災した方々のほうがよっぽどつらい思いをしておられたんだと今なら被災した方々の気持ちが分かります。

父は宮城県に行きいろんな活動をしました。使えなくなった家財道具を一生懸命ゴミとして運びました。「よそから来たボランティアにはゴミにしか見えないものでも、この人にとってはかけがえのない家族の思い出がつまった大切な宝物なんだ。」と父は思ったそうです。そうして父はたくさんの人達と出会いました。その人達はとてもやさしく、いつも笑顔であふれていました。塩釜の看護師さんは「震災の直後、泣いて泣いてもうこれ以上涙が出ないくらい泣いた。そして、ここから先は何があっても笑って過ごそうと心に誓った。泣いてばかりいたら被災地のことを心配してかけつけてくれるたくさんの人に申し訳ないから。」

と言っていたそうです。この言葉を聞いた時私はなんて心の強い人なんだろうと思いました。自分はこのなにひどい被害を受けているのにボランティアの人や心配をしてくれている人に申し訳ないと相手のことを先に考えておられるからです。ほかの人達は、「父と友達になれたことを感謝しつつも、本当は友達になるきっかけがなかった方が幸せなのだ。」と伝えてくれたそうです。そして、「そんなことを考えなくなり、友達になれて心から良かったと思えた時が本当の意味の復興といえると思う。それまで震災のことを忘れないでほしい。」そんなことを言っていたそうです。被害を受けながらもこんなに前向きに考えられるすばらしい方々に出会った父は幸せものです。被害を受けた方から逆に元気や勇気をもらっている気がします。娘として塩釜の方々に「本当にありがとうございます。」そう言いたいです。

東日本大震災が起こった二年半後の秋、台風による大雨で亀岡や南丹は水害を受けました。父は災害ボランティアセンターを立ち上げました。塩釜からはMさんがかけつけてくれました。みんなの寄せ書きを携えて。そこには、「勝たなくていい、負けるな」「目が前向きについているのはなぜだと思う？前へ前へ進むためだ!!」など、たくさんのお支えメッセージ

ジをいただきました。寄せ書きの真ん中にはでっかい字で「絆」と書かれています。その寄せ書きを私も実際に見ました。じっと絆という字を見ていると何かを感じます。つらい思いではない何かを。その時私は思いました。人は互いに一番しんどい時に相手を思いやる言葉をもって、その言葉によって人は救われるんだと。

とても大きな被害がたくさんあった東日本大震災。たくさんの人達が被害を受けました。この先、どんなことが起こったとしても助け合う気持ち、寄添う気持ち、そして絆という言葉をおぼれないうで生きていきたいです。たとえ私が直接手を貸すことができなかったとしても日本は一つ、世界は一つなんだから思いをつなぐことはできるはずです。おたがい手を取り合って身近にあるもの、そばにいる人から手をつないでいけば日本中が一つの輪になると思います。

人生の中には苦しくて泣き出しそうな時がいつか来ます。そんな時こそ笑顔で明るく過ごせるように互いに助け合って生きていきたいと思ひます。